

Grit を測定する Single Target-Implicit Association Test の作成の試み

稲垣 勉^{1,2} 澤海 崇文^{1,3} 澄川 采加^{1,2} 相川 充^{1,4}

¹ 教育テスト研究センター ² 鹿児島大学 ³ 流通経済大学 ⁴ 筑波大学

本研究は、「やり抜く力」「根性」などと呼ばれる Grit を潜在的に測定するための Single Target-Implicit Association Test-Grit (ST-IAT-Grit) を作成することを目的とした。200名の大学生を対象に、刺激語の予備調査を行った。その結果、Grit を構成する「努力の粘り強さ」および「興味の一貫性」を測定する ST-IAT-Grit の刺激語が選出された。今後は、この ST-IAT-Grit を用いた調査を行い、信頼性・妥当性を検討していく。

キーワード：Grit, ST-IAT, 刺激語, 予備調査

1. 問題と目的

近年において注目を集めている「非認知能力」の一つに Grit (Duckworth, Peterson, Matthews, & Kelly, 2007) があり、これは「やり抜く力」「耐える力」「根性」などと訳されている(井川・中西, 2019)。高い Grit を持つ者は、Grade Point Average (GPA) が高い、陸軍士官学校における過酷な訓練を乗り越えられる(Duckworth et al., 2007)、教員採用試験を受験し、一次試験に合格する可能性が高い(竹橋・樋口・尾崎・渡辺・豊沢, 2019)、対人援助職に就いている者においてバーンアウトしにくい(井川・中西, 2019)といった報告がある。Duckworth et al. (2007) が作成した Grit 尺度は「Perseverance of Effort」と「Consistency of Interests」という2つの下位尺度からなる12項目で構成され、その翻訳版も作成されている(竹橋他, 2019)。竹橋他(2019)では、前者は「努力の粘り強さ」、後者は「興味の一貫性」と呼ばれており、本研究でもこの名称を使用する。

先行研究から、高い Grit は望ましい結果をもたらすと言えるが、Grit を測定する尺度には一定の課題があると考えられる。例えば「努力の粘り強さ」を測定する項目は「重要な試験に打ち勝つため、困難を乗り越えてきた」「困難があっても、私はやる気を失わない」などがあり、「興味の一貫性」を測定する項目は「新しいアイデアや計画によって、それまで取り組んでいたことから注意がそれることがある」「目標を決めても、後から変えてしまうことがよくある」(いずれも逆転項目)などがある。これらの項目には素朴に「望ましい回答」があると思われる。例えばこれらの項目が、企業の就職試験における適性検査で用いられたとしよう。その企業に合格したいと思う者が、よい印象を与えたいと考えるのは自然なことである。そこで、努力の粘り強さで挙げた項目に「いいえ」と答えることや、興味の一貫性で挙げた項目に「はい」と答えることは、自らの印象を悪くすると考え、回答を歪める可能性がある。実際に、稲垣(藤井)・澤海・相川・中野(2017)は、就職試験場面において、自身をよく見せる、あるいは悪く見せようとする動機が実験的に与えられた場合、その動機の方角に沿って Big Five 尺度への回答が歪むことを示している。

また、先述のとおり Grit は「非」認知能力とされる。言わば自身で正確に把握することが難しい能力であるが、それを自己報告尺度で測定できるかという疑問も残る。

上記を受けて本研究では、Grit を測定するために新たな方法を提案する。それは、特定の概念間の連合を測定し、当人の潜在的態度やパーソナリティの指標とする潜在連合テスト (Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998: Implicit Association Test; 以下 IAT) である。IAT では、画面上に連続して表示される単語の分類課題を通して、特定の概念間の連合の程度

を測定する。例えば自尊心 IAT では、PC 画面上にカテゴリー次元（自己—他者）と属性次元（快い—不快な）に関連する刺激語（e.g., 私, 友人, 幸せな, 汚い）が表示され、調査対象者は各次元に対応するキーを押し、単語をグループ分けする。「可能な限り速く正確に行う」という教示の下、カテゴリー次元と属性次元が組み合わせられた試行を 2 種類行い、「自己—快い（他者—不快な）」の組み合わせ課題に要した時間が「自己—不快な（他者—快い）」の組み合わせ課題に要した時間より短いほど、潜在的自尊心が高いと判断される。種々の精神的健康の指標に対し、潜在的自尊心は、質問紙で測定する顕在的自尊心と交互作用効果を示すといった報告がある（e.g., 藤井, 2014; 藤井・澤海・相川, 2014）。また、潜在的自尊心は社会的望ましき反応と相関がみられないこと（藤井・上淵, 2010）などが報告されている。

こうした点を踏まえ本研究では、Grit の測定に IAT を用いる。IAT は自己—他者などの対カテゴリーを必要とするが、近年はこの制約を取り払った Single Target-IAT (Bluemke & Friese, 2008; 以下 ST-IAT) も存在する。これは、ターゲット概念（e.g., 自己—他者）の一方のみを用いる IAT である。Grit の「努力の粘り強さ」は、「自身がどれくらい粘り強いのか」を測定するものであり、「興味の一貫性」は、「自身がどれくらい興味を一貫させているか」を測定するものであると考えられる。そこで、「他者」カテゴリーの影響を取り除くために ST-IAT を使用し、参加者の Grit を潜在的に測定できる「ST-IAT-Grit」の作成を目指す。そのための第一段階として、本研究では予備調査を実施し、刺激語を選出する。

2. 方法

2.1 調査対象者 インターネット調査会社の大学生モニタ 200 名（男性 100 名, 女性 100 名, 平均年齢 20.62 歳, $SD = 1.94$ ）を対象とした。大学 1 年生から 4 年生まで、男女各 25 名ずつ回答を得た。

2.2 材料 本研究で測定しようとしている努力の粘り強さ、興味の一貫性について、カテゴリー語はそれぞれ「頑張り屋の—なまけ者の」「興味が一貫した—興味がぶれやすい」とした。これらのカテゴリーに属する刺激語の候補となる形容詞または形容動詞を、先行研究（沼崎・工藤, 2003）や類語辞典などを参考に 65 語選出した。この 65 語のそれぞれについて、「手続き」の箇所述べる方法で評価してもらった。

2.3. 手続き 調査対象者に対し、材料の箇所で述べた 65 語に対し、「頑張り屋の—なまけ者の」のどちらに近いと感じるかを -2（「頑張り屋の」に近い）—+2（「なまけ者の」に近い）で回答するよう求め、「興味が一貫している—興味がぶれやすい」のどちらに近いと感じるかも同様の方法で回答するよう求めた。「頑張り屋の—なまけ者の」「興味が一貫している—興味がぶれやすい」のカテゴリーに対する評価の提示順序と、-2—+2 に割り当てる表現はカウンターバランスをとった（e.g., 刺激語の候補が「頑張り屋の—なまけ者の」のいずれに近いかを評価する際、-2 というラベルは、ある参加者には「なまけ者の」として提示される一方、ある参加者には「頑張り屋の」として提示されるようにした）。

3. 結果

3.1 刺激語の選定 回答を集計し、ST-IAT-Grit の刺激語を選定するにあたり、次の工夫を行った。本研究では Grit における「努力の粘り強さ」と「興味の一貫性」という 2 つの側面を測定する ST-IAT を作成する。2 つの IAT において共通する単語が使用されると、回答者は混乱をきたす可能性がある。そこで、一方の IAT の刺激語として採用したものは、もう一方の IAT の刺激語としては採用しないことにした。例えば、「努力家の」という語が「頑張り屋の—なまけ者の」という次元において「頑張り屋の」に近いと評定された場合、この語が「興味が一貫した—興味がぶれやすい」という評価次元において「どちらで

もない」に近いと評定された場合に限り、「頑張り屋の一なまけ者の」次元の刺激語として採用することとした。したがって、努力の粘り強さを測定する ST-IAT と、興味の一貫性を測定する ST-IAT には、刺激語の重複はないよう留意した。上記の基準を用いて刺激語を選定した結果、Table1 に示す刺激語が採用された。

Table1 本研究で採用した刺激語

努力の粘り強さ		興味の一貫性	
頑張り屋の	なまけ者の	興味が一貫した	興味がぶれやすい
努力家の	ぐうたらな	意志の固い	飽きっぽい
勤勉な	だらけた	確固とした	移り気な
働き者の	やる気のない	揺れない	定まらない
まじめな	ふまじめな	曲がらない	揺れ動く
責任感の強い	面倒くさがりな	筋の通った	ふらふらした

4. 考察

本研究は、やり抜く力である Grit を潜在的に測定するための刺激語の選定を行った。予備調査の結果、努力の粘り強さならびに興味の一貫性を測定するための ST-IAT-Grit が作成された。今後はこの測度を用いて、実際の行動指標や他の特性との関係を検討していきたい。また、問題と目的の箇所挙げた自己報告式の Grit 尺度が社会的望ましさの影響を受けるか否かについては実証できていないため、この点も併せて検討していく。

5. 参考文献

- Bluemke, M., & Friese, M. (2008) Reliability and validity of the single-target IAT (ST-IAT): Assessing automatic affect towards multiple attitude objects, *European Journal of Social Psychology*, 38: 977–997
- Duckworth, A. L., Peterson, C., Matthews, M. D. & Kelly, D. R. (2007) Grit: Perseverance and passion for long-term goals, *Journal of Personality and Social Psychology*, 92: 1087–1101
- 藤井 勉 (2014) 顕在的・潜在的自尊感情の不一致と抑うつ・不安および内集団ひいきの関連, *心理学研究*, 85: 93–99
- 藤井 勉・澤海崇文・相川 充 (2014) 顕在的・潜在的自尊心の不一致と自己愛—自己愛の3下位尺度との関連から—, *感情心理学研究*, 21: 162–168
- 藤井 勉・上淵 寿 (2010) 紙筆版 IAT を用いた自尊心査定を試み, *東京学芸大学紀要総合教育科学系 I*, 61: 113–120
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998) Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74: 1464–1480
- 井川純一・中西大輔 (2019) 対人援助職のグリット (Grit) とバーンアウト傾向及び社会的地位の関係—高グリット者はバーンアウトしにくいのか?—, *パーソナリティ研究*, 27:201–220
- 稲垣(藤井) 勉・澤海崇文・相川 充・中野友香子 (2017) 潜在的な感情の評定は自己呈示動機によって歪みうるか?, *教育テスト研究センター年報*, 2:50–52
- 沼崎 誠・工藤恵理子 (2003) 自己高揚的呈示と自己卑下の呈示が呈示者の能力の推定に及ぼす効果—実験室実験とシナリオ実験との相違—, *実験社会心理学研究*, 43: 36–51
- 竹橋洋毅・樋口 収・尾崎由佳・渡辺 匠・豊沢純子 (2019) 日本語版グリット尺度の作成および信頼性・妥当性の検討, *心理学研究*, 89:580–590

